属人区長の書簡 (2012年9月)

「苦しみのない愛はあり得ません。自分を捨てる苦しみ。 しに、愛はあり得ません。の ではあり得ません。の でネディアン・ディ属人区 でない でない で解説 において解説 し、 きなし、 きない で考察する。

2012/09/07

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに!

いつものように、この休息の時を 様々な場所の娘たちや息子たちにも うために活用しようと思ってした。皆さんに会い、共に過ごしたい。 に活発な使徒職進展の緊急性に触ることは、私の助けになるからが出 す。けれども、そうすることが出 なかったので、Omnia in bonum! (万事が益となる)、なぜなられ プロナからもっと集中的に世界を 「駆け巡り」ましたから。

この街に来る前、7月の初めにはバルセローナとジローナを訪れて、団欒で多くの人たちと会い、若者たちとの使徒職活動が盛んに繰り広げられている場所に設置された聖ホセマリア像を祝福しまし。その後、すでに話したように、ファチマの聖母の御前で祈り、皆さんの兄弟姉妹たち

に会うため、ポルトガルに行きました。先月の23日には、ルルドに行き、オプス・デイ全体と共に聖母を称え、その取次ぎを嘆願し、皆を代表して感謝を捧げました。

またオランダにも短い旅行をしました。属人区の人たちに会う喜びに加えて、創立者と愛するドン・アルバのと共に、かのサプス・デスを明代〉を部分的に時ではまして、大史時代をいるのであるでは、からいを地では、から、はいる事ををしまりがでしましょう。

明日、9月2日、6ヶ月前に助祭になった3人のアソシエートの兄弟に、司祭叙階の秘跡を授けます。このことに関しても、聖ホセマリアのことが記憶によみがえります。創立

者は、アソシエートの息子たちから も司祭の出ることを望んでおられた のです。彼らのために祈ってください。またこの時期、世界中で行われ ている使徒職活動の実りのためにも 祈ってください。さらに、普段の生 活で私たち皆を支えてくれている 半球の国々のためにも祈りましょ う。

今月の中旬、9月14日、聖十字架の称賛の日を祝うことを母なる教会に感謝しましょう。十字架は全てのものを御元に引き寄せるキリストの栄光の座である[i]と固く信じておられた創立者は、特別な喜びのうちにこの祝日の準備をし、祝っておられました。オプス・デイの本部に、典礼上のこの祝日の場面

一異教徒たちから聖なる十字架を取り返した後でエルサレムに再設置する場面 の大きな壁画を置く事を、 どれほど期待を込めて提案された か、皆さんには想像もつかないで しょう。

心に深く根ざしたこの信心の表現として、創立者は常に聖十字架の聖遺物を身につけ、その後継者たちにもそうすることを望みました。まずした。ないドン・アルバロが、そしてが、私が身につけています。創立者が、毎日、寝室へ引き下がる前や一日の始めに、そして度々、信心をは感動したものです。

この祝日の翌日、9月15日は、十字 架の下でイエスと共に苦しみ、完 贖いのみ業に協力される聖母の人よご覧なされるで、「婦人」 を記念さい。そこで、一ず」 「iii」 新たとき、聖母のそのですりです。 主が仰せになったとき、聖母のあるした。 な母性が明らかにされました。 て聖母は毅然とした優しさを子供と て、私たちをご自分の本当のです。 して受け入れてくださったのです。

この二つの祝日は私たちキリスト者 に、私たちの生活に立ち現れる大小 の十字架を、愚痴をこぼしたり嘆い たりせずに愛を込めて担うようにと の、強力な誘い、火急の呼びかけで す。なぜなら、全ての十字架は、私 たちをイエス・キリストに結びつける 神の特別な祝福だからです。自分の 意に反することを十字架と呼び、 家々から、何よりも生き方そのもの から十字架を取り去ってしまった多 くの人たちについての、聖ホセマリ アのあのコメントを忘れないように しましょう。聖なる十字架は、いつ いかなるときも、まず一人ひとりの 個人的な回心を助け、再福音化の戦 いに勝つ力と自由を与えるものだと いうことを受け入れていないので す。

数年前に教皇様がこう話しておられます。「苦しみのない愛はあり得ません。自分を捨て、まことの自由のために自分を造り変え、清める苦し

みなしに、愛はあり得ません。苦し むに値するものがなければ、人生も その価値を失います。聖体は私たち キリスト者の生活の中心です。聖体 は、私たちのためにイエスが捧げた いけにえに基づきます。聖体は、十 字架において頂点に達した、愛の苦 しみから生まれました。それは、私 たちにご自分を与えた愛です。私た ちはこの愛によって生きます。聖体 は、世にあってキリストと共に、キ リストのために苦しむ勇気と力を私 たちに与えます。私たちは知ってい るからです。まさにこのように苦し むことによって、私たちの人生は偉 大なものとなり、成熟したものとな り、真のものとなるのだということ を。| [iii]

私たちが出会う全ての人たちが、このように落ち着きと喜びをもって向き合う苦しみには価値があるのだと考えるように、助けましょう。創立者はあるとき、苦しみながらこう自

問しました。「今日、誰が聖なる十 字架と出会いに行くのでしょうか。 そんな人はごく僅かです。十字架に 対する世の人々の反応はどんなもの か、もう知っているでしょう。カト リック信者と言われている人たちの 中にも、聖パウロが書いているよう に、恥ずべきことであり、ばかげた ことだと考えている人たちがいるの です。 ludæis guidem scándalum. géntibus autem stultítiam(1コリン ト1,23) ユダヤ人にはつまずかせる もの、異邦人には愚かなもの。主 よ、幾世紀が過ぎてもこの異常な状 況は続いており、御身を愛し、御身 に従っていると言っている人たちの 中にさえも見られるのです。| [iv] 事実、使徒がコリントの人たちに書 き送ったことが現代にも見られるの です。「ユダヤ人はしるしを求め、 ギリシャ人は知恵を探しますが、私 たちは、十字架に付けられたキリス トを宣べ伝えています。すなわち、 ユダヤ人にはつまずかせるもの、異

邦人には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシャ人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。」[v]

創立者は続けます。「子供たちよ、 大げさに言っているのではないこと が分かるでしょう。未だに十字架は 命のしるしではなく死の象徴なので す。未だに十字架は栄光の玉座では なく、処刑台であるかのように忌み 嫌われています。未だにキリスト者 たちは十字架を愛のうちに担うこと をせずに、苦しみを与えるものとし て追い払っているのです。| [vi] 私 たち一人ひとり、あなたと私は、本 当に主の十字架を愛しているので しょうか。十字架上のキリストと一 致することこそが、超自然的な実り と真の喜びの源であることを確信し ているでしょうか。日々、不愉快な こと、つまり病気や計画を邪魔する こと、仕事時間に出くわす意に反す

ムの大きな金塊になり、集めた宝石のかけらで素晴らしいダイヤモンド、大きなルビー、光り輝くエメラルドが出来上がるでしょう。」[vii]

簡単に実行できることですが、それにはカルワリオのキリストに同伴する望みがなければなりません。創立者が次のように要約しています。

「十字架に対する態度は三つありま す。まず、ほとんどの人たちがする ように、この賜から逃げること。次 に、大きな試練を望み、異常なほど の犠牲を実行しつつ、無鉄砲に十字 架を探し求めること。この衝動が神 からのものでないならば、時官を得 たものとは思えません。隠れた高慢 から出たものであり得るからです。 三つ目の態度は、主がお送りになる ときにそれを喜んで受け入れること です。これこそ、十字架に対する最 も相応しい態度だと言えるでしょ う。| [viii]

再び聖母に目を向けましょう。マリ アが御子の傍らに寄り添い、静かに 十字架の下にたたずまれたことは、 間違いなく神の特別な恩恵だったの です。しかし、この恩恵は、聖母が お告げの時からというよりもそれ以 前から、神のお望みを受け入れるべ く心と魂を全面的に神の御手に委 ね、応え続けられたことによって、 受け取られたものなのです。「ナザ レの家から、御子が使徒ヨハネをマ リアにゆだねた十字架を経て、エル サレムの家に至るまで、マリアの歩 みは、たゆまずに精神の集中を保つ 力によって特徴づけられます。こう してマリアは、すべての出来事を神 のみ前で心の沈黙のうちに思い巡ら します (ルカ2・19-51参照)。ま た、神のみ前で黙想することを通じ て、神のみ心を理解し、それを心に 受け入れることができるようになり ます。| [ix]

これこそ、教会が聖母のこの祝日を 通して私たちに伝える偉大な教えで す。聖母は、全生活を通して神のみ 旨を果たすことだけに熱意を傾けら れました。神のみ旨が大変な苦しみ を伴うものであるときもそうでし た。それを全て、嘆くことなく、人 間的にも超自然的にも優雅に、目立 たずに果たされたのです。聖母は、 聖ホセマリアが度々思い起こしたよ うに、「隠れた、黙々とした犠牲の 先生」「x」です。聖母の模範は、日々 出合う大小の意に反すること 一ほと んどが小さなことですが一

を、愛のうちに受け入れるよう私たちを励ましてくれます。

社会の中での観想生活を望む人たちの模範である聖母のこの振舞い方を、自分のものとするように努めましょう。日常生活には喜びや苦しみを伴う出来事がありますが、それを 念祷のテーマにして、その一つひと つに神の愛すべきみ旨を見出し、うまれて受け入れましょう。そを喜いてでは、イエストの聖心をいまれば、イエスができないといったができるというといるというというというというというにしている。とないでは、大でではないでである。とないである。」[xi]

ミサ聖祭中、祭壇上の十字架を眺めるとき、創立者が書かれたようにもいるように勧めているように勧めている小さな十字架像に接吻すると接拶したりするとき、これらの心をではないます。「神は剣ではなって、十はで世を贖われました。イエスは亡

くなれたとき両腕を広げられまし た。これは何よりも受け入れのしぐ さです。私たちに命を与えるため に、私たちのために釘付けされるに 任されたのです。同時に、両腕を広 げることは、祈る人の姿でもありま す。司祭が両腕を広げて祈るときに するしぐさです。イエスは、ご受難 を、その苦しみとご死去を、祈り に、神と人々に対する愛の行為に変 えられたのです。それゆえ、両手を 広げて十字架に付けられたキリスト のお姿は、抱擁のしぐさでもありま す。私たちをご自分のもとに引き寄 せ、愛情深く抱きしめようとお望み です。これが、生ける神のお姿であ り、神ご自身なのです。ですから、 私たちはその両手に全てを委ねるこ とができるのです。| [xii]

ベネディクト十六世のこの言葉を再 読し、聖ホセマリアの特徴的な姿を より鮮明に思い浮かべました。十字 架に付けられたキリストについて話 教皇様が指摘されます。「マリアは、公生活の間、十字架のもと慎みでいるまで、御子の歩みのすべてに慎り歩みに従いました。そして今やの困難したりをもって教会の困難したりながけます。」[xiii] この困難があたりする犠牲をしっかり果たりする犠牲をしっかり果た母のとができるよう、よう。数週間によりまりまりには信仰年が始まりまりには信仰年が始まりまります。

す。この信仰年を、Mater Ecclésiæ 教会の母であられる聖母の母なる取 り成しに委ねましょう。そして、教 皇様のご意向に応えて、あらゆると きに真のキリスト者として振る舞 い、行いと言葉でカトリック信仰を はっきりと証しするように努めま しょう。市民社会や私たちが生活を 繰り広げている様々な分野に、イエ ス・キリストの十字架だけがもたらす ことのできる霊的超自然的な生活を 加える必要があります。ですから、 「あなた方と共にこの過越しの食事 をしたいと、私は切に願っていた| [xiv]と仰り、約束の場所カルワリオ に赴かれた師イエスの教えを、自虐 的になることなく、落ち着いて弛ま ず学んでいきましょう。

私の意向のため祈り続けてください。祈りと犠牲のうちに、また教会と教皇様と全ての人たちに仕える熱意のうちに「完全に一つになるため」[xv]です。そのため、悲しみの

聖母の祝日にはドン・アルバロに助けてもらいましょう。ドン・アルバロはまさにこの日、創立者からバトンを引き継がれたのでした。聖ホセマリアの最初の後継者にいつも見られたアの最初な雰囲気は、さらに強まったと思いるは、よって、ドン・アルバロと関わった人たちは、主なるがです。

今月14日から16日にかけてレバノンへ司牧旅行に出かけられる教皇様のお供をしましょう。そこで教皇様は、2年前にローマで開催された中東に関する司教代表者会議の実りをおしたります。主が足跡を残したります。主が足跡を残しまう。そして、Regína pacis 平和の元后である聖母に、中東の国々めましょう。

心からの愛を込めて祝福を送りま す。

皆さんのパドレ

†ハビエル

トレシウダー、2012年9月1日

[i] ヨハネ12,32。

[ii] ヨハネ19,26

[iii] ベネディクト十六世、2008年6 月28日、パウロ年開幕時の講話

[iv] 聖ホセマリア、1964年5月3日、 説教のメモ

[v] 1コリント1, 22-24

[vi] 聖ホセマリア、1964年5月3日、 説教のメモ。

[vii] 聖ホセマリア、1968年

[viii] 聖ホセマリア、1964年5月3 日、説教のメモ

[ix] ベネディクト十六世、2012年3 月14日、一般謁見の講話

[x] 聖ホセマリア、『道』509

[xi] 同上185

[xii] ベネディクト十六世、2007年9 月8日、マリアゼルでの説教

[xiii] ベネディクト十六世、2012年3 月14日、一般謁見の講話

[xiv] ルカ22, 15.

[xv] ヨハネ17, 23.

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shuren-qu-chang-noshujian-2012nian-9yue/ (2025/12/16)